

万葉集における「見ゆ」の対象

建部一男

三八

「見ゆ」の意味を古語辞書でしらべるとまず、「見える」とあり、次に、「見られる・いらつしやる・結婚する・思われる」という様にあつて複雑である。

私は今、「見ゆ」の意味をしらべるのに、万葉集での「見ゆ」の対象を整理することによつて考えようとした。本論は、いわばその研究の作業過程における中間報告である。

源頼朝の「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」という歌は、万葉調の歌の一例だと思ふが、この雄大な風景に接した時の卒直な歌の響きと共に、「見ゆ」の使い方にも万葉調がこもつてゐるのではないだろうか。この場合、「沖の小島に波の寄る」が作者の「見ゆ」の対象と考えられる。

万葉集には、「見ゆ」又はその活用形を含む歌で百九十二首（一首に二個あるものが二首あるので百九十四例）ある。その対象を全部とり上げ、それらの間に共通する要素が見つからないかということ、つまり、「——見ゆ」「見ゆ——」という時の——を整理分類し、「見ゆ」の意味を考えたいのである。

はじめに、「見ゆ」の対象を大別しておく。「見ゆ」の対象は普通、風景が多いだろうと推定されるだろうが、万葉集では七十五首ある。

風景以外を人物と動植物その他の場合に分け、全体を三大別する。例えば、

○ 稻日野も行き過ぎがてに思へれば心恋しきかの鳥所見（253）
歌観番号、以下同じ傍線漢字は「みゆ」の場合、直接の対象を鳥と見て、風景の中に入れ、

○ 妹が当り今ぞ吾が行く目のみだに我に見こそ事間はずとも（1211）
などは人物対象の類に入れ

○ 鶯の音きくなべに梅の花わぎへのそこに咲きて散る美由（1199）
などは動植物の類に入れる。

前述の通り、風景対象の場合は百九十四例中七十五例で全体の三十八・六％に当り、人物の場合が全体の五十二％に当る百一例になり、数に於いては最高である。動植物の例は十五例で、全体の七・七％である。ただ、

○ もかり舟沖こぎくらし妹が鳥かたみの浦にかけるたづ美由（1199）
などは、「たづ」が対象になつてゐるが、風景対象の中に入れて考えた。

この様に万葉集中の「見ゆ」を含む歌全部をあげて大別すると、そのパーセンテージは、

1 風景…………… 75例・38.6%

2 人物………101例・52.0%

3 動植物その他…18例・9.2%
となる。

以下右の順に今少し細かく「見ゆ」の対象を見て行く。

風景の中で最も多いのは約半数にのぼる海、及びその周辺であり、そこに働く人々である。これは三十五例であり、その歌は次の番号のものである。

253	255	1-2
3609	256	
3672	270	
3890	357	
4017	917	
4355	935	
4400	1003	
	1033	
	1063	
	1160	
	1163	
	1178	
	1182	
	1185	
	1194	
	1199	
	1202	
	1226	
	1227	
	1233	
	1715	
	1996	
	2573	
	3167	
	3243	
	3449	

○たびにして物恋しきに山もとのあけのそば船おきにこぐ所見
(370)

は、巻三の高市黒人の歌である。同巻開巻の柿本人麻呂の一連の旅の歌などは、そのよい例であるが、広い海を見た時の感動と共に、旅の感傷や、やるせない望郷の念が漂よつているかに感じられる。海を「見ゆ」の対象として考える時には、万葉時代の旅の苦難も考えなければならぬであろう。犬養孝氏は、「地理と風土」^{註⑤}と題して次の様に述べておられる。

「潮と波との苦難恐怖と戦いつつ塩飽の島々や小豆島を過ぎて広大な播磨灘へ出ても、まだ播磨五泊とつづく印南野かけての焼々たる播磨の海岸線なしには、あまざかる・ひなの・ながぢゆ・恋ひ来る・発想は考えられないし、広大な海波がやがて淡路島山によつてせばまりゆく明石大門、しかも、潮の工合では一夜も潮待ち

しなければならぬ恐怖の瀬戸なしには二つの地名を、『より・見ゆ』によつて動的に表出せしめ、心情の躍動をはかる呼吸は理解し得ない。ましてや、とうてい風光明媚御光内海の旅ではなく、当時の『あまざかる夷』から久々に見る『やまと』の遠望である……。」

右の説明は、「見ゆ」を考える時の重要な手がかりとなろう。

この様に、風景対象の「見ゆ」は、単に空間的距離のみでなく、心理的距離もその中に含まれているといえよう。今日の会話に用いられる。

「この写真ではあの山が丘に見える。」などの「見える」とは趣を異にする。

次に国・郷土・夫(又は妻)のいる土地、都などを「見ゆ」の対象にしたものが九例ある。

44	78
942	1271
3346	3441
3608	3720
4434	

先にあげた人磨や黒人の歌にも郷土を念頭に置いたものが多い。

記紀に見られる望郷の歌が、いずれも古代国家の行事の一つである天皇の「国見」に基づくものであることは、すでに岩波『日本文学史・Ⅲ・古代』^{註⑤}その他で、土橋寛氏の詳細に述べられている所である。

○吾妹子をいさみの山を高めいかもやまとの不所見国遠みかも(主)
○とぶ鳥のあすかの里をおきていなば君が当りは不所見かもあらむ

など九首の中の「国」や「里」は郷里であり、遠い、なつかしい

所である。

○ひばり上る春辺とさやになりぬれば都も美要受かすたなびく

(4434)

右は「都」が対象であるが、これ以外は全部、妹又は背の家をその中に含む土地を対象としている歌の共通した特色である。

次に、風、雲、夜、月など天然現象としたものは十八例ある。

(・印は月を対象にしたものである。)

317 353 393 1068 1083 1294 1295 1571 1701 1714 2168 2223 3208 3225 3625 4122 4123 4160

○み吉野の高城の山に白雲は行き憚かりて棚引ける所見(333)

は、純粹に雲を対象としているが、

○朝月日向ひの山に月立てる所見遠妻を持ちたる人し見つしぬば

む(294)

は、単に月だけを見ているのではなくて、妹や背を偲ぶよすがとしてゐる。いずれにせよ、天然現象を「見ゆ」の対象とする場合、その対象は、遠いもの・かすかなもの・あこがれなどに対する作者の気持がある。

山野を対象にした場合は十二例ある。

48 262 927 998 1082 1879 2177 3391 3807 3924 4003 4513

右には、山野の周辺、又、そこにゐる人、煙なども含める。

○足引の山にも野にもみかり人さつ矢たばさみ乱れたる所見(621)

四〇

の様に、そこに出てくる人は常に複数であり、又、その群が動いている。これは、海を対象にした歌の場合でも同じでめる。その他、海を対象にした時と同じく、広い、はるかななたを対象にしている。

以上、見ゆの対象を風景にした場合その対象に共通する特色は、「遠いもの・広いもの・あこがれるもの」である。そして、それらに対する作者の空間的距離と共に、心理的距離における感動が表現されているといえよう。

次に人物を対象にした場合を見よう。これには百一例がある。まずこの百一例の中で、

○ひとよには再び美要農父母をおきてや長くあが別れなむ(891)

の様に親子兄弟友人等を対象にしたものは

149 724 807 809 891 4207 4220

の七首しかなく、九十三%が、妹又は背を「見ゆ」の対象にしていることが注目される。

○袖ふるが見べき限り吾はあれどその松が枝に隠れたりけり(3825)

北山茂夫氏の説によると「戸主は徭役のかゝらない生産者としての女を、できるだけ自家におきたかつたのだ。」

とあり、貴族間の政略結婚だけでなく庶民においても当間の恋愛の前後に横たわる苦悩がいかに重苦しかったがわかる。

○吾が思ふ人に知らせや玉匣開きあけつと夢にし所見(691)

○物もふと人には美要繻下紐の下ゆ恋ふるに月ぞへにける(3708)

などに、当時の恋の苦悩から逃れんとする一種の信仰的な習慣が

見られる。

さらにこれらの場合の特色は、背を対象とする三十九首中の三分の二に当る二十六首が、背を夢の中に「見ゆ」としていることである。之は、妹を「見ゆ」の対象とした時と同様である。妹を「見ゆ」の対象にした五十六首の中で約五分の四の四十四例が夢の中においてであつて、「人物は妹・背が大部分であること」「人物の七割強が夢の中においてであること」は人物対象の場合の注意すべき事実であらう。今これを歌の番号で示すと次の通りである。

A 背・ 135 619 1526 1535 2299 2394 2801 2972 3015 3202 3506 3771 3817 (13例)

B 夢・ 面影の中の背・ 150 396 518 633 639 710 716 772 2569 2589 2754 2812 2830 2874 2890 2956 2958

2359 3120 3280 3281 3283 3471 3708 3929 3977 (26例)

C 妹・ 613 1303 1809 1928 2009 2530 3034 3052 3068 3129 3212 3796 (12例)

D 夢・面影の中の妹・ 210 490 581 662 749—1 749—2 754 767 1211 1236 1630 1729 2462 2464 2501 2587 2595—1 2595—2

2607 2634 2642 2786 2814 2815 2842 2849 2937 2957 3085 3108 3111 3117 3118 3128 3137 3138 3142 3162 3473 3639 3647 3735 3738 4322 (44例)

○空蟬の目しげくはぬば玉の夜の夢にをつぎて所見こそ (3108)
○門立てて戸はさせれども盗人のえりたる穴ゆ入りて所見けむ (3118)

○今さらに寝めや我背子あら玉の全夜もおちず夢に所見こそ (3120)
○吾妹子を夢に見来と倭路のわたり瀬ごとに手向けわがする (3128)

○国遠みたゞにあはず夢にだに吾に所見こそ相あはむ日まで (3142)

以上の歌は、前述の一種の信仰を表わし、いずれも、「見える・見られる」という視覚的なものを超えて、「見えてほしい」という心境である。

又現実には、「見ゆ」の対象にした時も、

○かづきする海子はのれどもわたつみの心を得ねば所見といはなくに (1503) という譬喩歌や、

○かぎろひのほのかに所見てわかれなばもとなや恋ひむあふ時まで (1526)

の類、ほかに 2972 3015 3052 の歌などは、「見ゆ」が、会う・会いに来る」に近い意味で使われている様に思う。これは、風景対象の場合には見られなかつたことである。

以上、人物対象の場合をまとめると、「見ゆ」の対象は、「遠い・かすかな」又それだけ「憧れの強い」ものを対象としているといえよう。

動植物を「見ゆ」の対象としているものは次の十五首ある。前の十二首が植物、後の三首が動物である。

841 1426 1435 1579 1887 2105 2344 4060 4086 4087 4259 4517 1897 3530 4181

○河津鳴くかみなび河に影所見て今やさくらむ山ぶきの花 (1435)

○吾勢子に見せむと思ひし梅の花それとも所見ず雪の降れば (1426)

などは植物であるがこのほか、萩・桜・橘・ゆり・紅葉などがその対象となつている。右の二例だけでなく、「見ゆ」の状態は、

「ほのかに」であり、影であり、「散る・隠れる・見えぬ」という場合であるのが特色である、動物の場合も、

○春去ればもすの草ぐき所見ねども吾は見やらむ君があたりは

(1397)

の如く、「かくれて見えぬ」状態である。動植物の場合、なぜこのようなのか、偶然なのかそれは明確にはわからぬ。対象と作者の間の距離は、風景対象の場合に見られたような大きな空間的距離や、人物対象の時のような心理的距離は顕著に見られない。いわゆるコンアド系にその対象の方向を考える時、風景や人物が、ソ系やア系に多くとられたのに比べて、今の場合は下系にとらえられている。今までの様にその対象に対する作者の気持に共通する特色をあげる時、「とらえられない・不安定な・見えない」ものに對する気持があるであらう。

風景・人物・動植物のいずれにも入らぬものが三首ある。

○吾が思ひを人に知らせや玉匣開きあけつと夢にし所見

(591・既出)

○白縫の筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖かに所見

(336)

○筑波ねにそがひに美由流あしほ山あしかるとかもさね見延なくに

(3961)

右の順序にXYZとするとXYZに共通することは対象が風景・人物・動植物のいずれにも入らぬことである。XYは加工品を対象としている。又、YZにおいては「見ゆ」が、直前に連用修飾語をもつのが共通する特色である。この二つの共通点は百九十四例中他に例を見ない。

右の三首の中で「白縫の……」について若干のべる。この歌は、

斉藤茂吉の『万葉秀歌』にも出ている。これによると、万葉集故證で、岸本由豆流が、「之は競にたとえて女性に對する憧れを詠んだものか」という説を出したところ。真淵は、「綿そのもの」に對するあこがれであると言つた由である。契沖は万葉代匠記で

「綿ノ功用ヲホルナリ」

といい、又、

溫和ノ相アル人ハ打見ルヨリ仁愛アリヌヘクオホユレハ世ノ誠トモ成ヌヘキ歌ナリ」

とも説いている。

前述したXYに共通する性質、YZに共通する性質から見ても、又、「見ゆ」の対象の多くが万葉集においては熱情的に慕う異性又はその面影で占められていることなどを考えると私にとつては岸本由豆流説も捨て難い。

以上、実例の三割位しか出さずにのべたので論旨の徹底しなかつた所もあるが、「見ゆ」の対象を整理した時、共通してとらえられる対象の特色を簡条書きにしてみると次の様に考えられる。

1 風景（空間的距離をにおいて）

広い・遠い・なつかしいもの

2 人物（精神的・空間的距離をにおいて）

相愛の異性、七割強が「夢」の中

3 特にあこがれ・恋しさ・なつかしさを感じているもの

動植物的距離をにおいて、ただし距離は不定

かくれたもの・はかないもの・あこがれの強いもの

小論は七月二日の立命館日本文学会研究会（第十三回）で発表し、たものをはじめそのまゝ文にしたものである。発表後に小論の不備な点について御指導賜わった国崎望久太郎先生、及び、小論をまとめるに当つて最初から種々有益なヒントを与えていただいた長田久男氏の御厚意に厚くお礼を申し上げて稿を閉じる。

註1・角川「古語辞典」「見ゆ」の項

註2・「解釈と鑑賞」34年5月号、46頁

註3・「日本文学史」・Ⅲ・古代篇・古代歌謡・12頁

註4・「解釈と鑑賞」31年10月号・26頁

註5・「見ゆ」が積極的な、又、それだけ感動的な意味で使われている例である。作者と対象の間の距離が狭はめられてく

る時に、それが「結婚する」意味に使われる様になつたのであろう。古今集や平安朝の物語の中の歌に、「見ゆ」が終止形で使われている例が少なく（調査未了で早急な推論は下せないが）「見ゆ」又はその活用形の下に、「かな」「らむ」「む」など、作者の意識を強く押し出した辞がつけられられていることは、万葉集の「見ゆ」の使い方と対照をなす傾向であらう。

右の様な推定は予想であつて、今後の研究上の問題として一往、ここではこれ以上触れない。

註6・「契沖全集」1・662頁

（八月三日）